

岡山方言の不定語疑問文をめぐって

—対照研究的視点をふまえた記述的一般化—

三宅知宏

1. はじめに

本稿は、岡山方言（中国・四国地方方言）の不定語疑問文（WH 疑問文）における、主文の述語が特殊な屈折変化を起こす現象をめぐって、考察することを目的とする。

詳細は後述するが、本稿が考察の対象とする現象は、次の(1)で示されるようなものである（下段は標準語訳）。

(1)どけー行きゃー／どけー行ったら／どこが良けりゃー／どこが静かなら／どこなら
どこへ行く？ どこへ行った？ どこが良い？ どこが静かだ？ どこだ？

上例の各文は、不定語疑問文としての意味を持つが、同時に、述語の形態は、主文末では不定語疑問文の場合のみに文法的になる特殊なものとなっている。

この、標準語には見られない、興味深い現象は、虫明(1982)では「疑問詞の係り結び」として指摘されているものである¹。

(2)「疑問詞の係り結び」：岡山方言では文中のイツ・ドコなどの疑問詞を受けて活用語の仮定形で文を結び、疑問文（疑問・反語）を構成する。 （虫明(1982:100)）

本稿の主な論旨は、次の3点に集約される。

- ①上のような現象に関して、対照研究（特に統語論的分析）の視点に基づいた記述的一般化を行う。
- ②上の一般化に関して、標準語との対照を行う。
- ③日本語の WH 疑問文の統語論的分析への示唆を行う（示唆にとどまる）。

¹ 虫明(1958)において既に、この現象は指摘されている。また、現在、岡山方言、および中国・四国方言の一部の記述において、この現象は、「係り結び」と呼ばれることが多いが、本稿では、後述するところがあるように、「係り結び」の用語を用いることは不適切と考える。

本稿は、以下のような構成に従って論を進める。2. で、この現象の実態について、確認をした上で、3. で、①の点について、4. で、②の点について、5. で、③の点について、それぞれ論じる。6. で、まとめを行う。

2. 実態

2. 1 地理的分布

はじめに、この現象の地理的な分布をみておこう。「方言文法全国地図」では、次にあげる項目「260」に不定語疑問文（発話行為としては反語）の例がある。

(3) 260 誰がやるものか

質問文：「そんなこと誰がやるものか」と強く言うとき、「誰がやるものか」のところをどのように言いますか。

この調査結果として、〈jaryaa〉〈jarya〉〈suryaa〉の3つの語形が、岡山全域、広島の一部、四国（香川、徳島、高知、愛媛）各地で観察されている²。これによれば、当該の現象は、中国・四国地方に広く分布しているように見えるが、内実には異なりがあり、最も目立つのは岡山方言と言ってよいようである。

たとえば、次は、(4)が広島、(5)が徳島、(6)が愛媛の各方言の記述であるが、いずれも岡山方言の記述に比べて、極めて簡略なものでしかない³。

(4) ドシテ イクンナラ。なぜ行くのか。〈広島市〉

「これは、疑問詞の文末が仮定形で結ばれるという一種の係結びによって成立した文末詞である。岡山県、広島県で盛んなものであるが、上品さはない。」(神鳥(1982:128))

(5) 「仮定形」の用法②

疑問語と呼応… [何ションナラ?]・[何シヨリャ?] (森(1982:345))

(6) 反撥表現 ドヒタンナラ。どうしたんだい(越智郡大三島町)

のように反問する言い方は、県下に広い分布が認められる。(江端(1982:416))

次は、井上・吉岡(監修)(2003)における『ごんぎつね』の各方言訳であるが、岡山方言は、当該の現象を用いて訳されているのに対し、他の方言は用いられていない。

² これらの語形は、“やる”“する”の「仮定形」とみなされるものであり、当該の現象が起きているとみなされる。

³ 香川、高知はそもそも記述がない。

- (7)(原文):兵十「母さんが死んでしまってから不思議なことがたくさんあるんだよ。」
加助「ええっ何だね。」
(岡山):加助「ええっ なんならー。」 (香川):加助「え なんがあるんのいや。」
(島根):加助「はあん なんごとだに。」 (高知):加助「え なんでえ? それ。」

次は、岡山、鳥取、島根の3方言で一巻本となっている、国立国語研究所(編)(2007)の「岡山」における文法の説明の一節である。当該の現象について記述しているが、これに対し、「鳥取」「島根」には記述が存在しない。

- (8)疑問詞を受けて仮定形で文を結び、疑問や反語を表す。ナニガミタケリャー (何が見たいか)

以上のようなことを傍証として、当該の現象は、岡山県(広島県の一部)に最も顕著に見られる現象であるとみなしておく。

2. 2 話者

以下にあげる例は、当該の現象の実例である(いずれも下線は筆者)。

- (8)「まったく、おまえら、こんなところでなにしとるんなら」東谷が腰に手を当て、問つめるようなきつい声で言う。(あさのあつこ著『バッテリーⅡ』角川文庫)
- (9)『『ジョージ』がねえが』男の子がつぶやいた。私は体を硬くした。うつむいたまま、目だけをこっちに向けて睨まれたからだ。「なんで『ジョージ』がねえんなら？」(中略)布の上に並んだ名前を一個一個確認して、「ほんとだ。ないですね」と作り笑いをした。(原田マハ著『で一れーガールズ』祥伝社)
- (10)岡山県小田郡矢掛町 1979 談話 (A: 女 60 歳農業, B: 男 61 歳農業)
A: マー ヘーデモ アッコラヘンオ ナニユ シテナラ⁴
まあ それでも あそこあたりを なにを なさるなら (※訳はママ)
B: ニチョーバー ナニユ シズミャー
2 町くらい なにを 沈めば (※訳はママ) (国立国語研究所(編)(2007))
- (11)岡山弁のある風景②中年社員の真実
「せーがーじゃて、わしゃーよわっとなじゃ。」「なんなー、どねーしたゆーんなら。」

4 “してじゃ”という尊敬語形の仮定形。“じゃ”は標準語の“だ”の相当し、仮定形は“なら”になる。

(12)岡山弁のある風景④恋人たちの場面

「わりーわりー，またして。どけーいきゃー。」「えーっ？ いまごろどけーいきゃーゆーて，まさか，あのみしょーよやくしとらんの？」 ((11)(12)とも青山(1998))

上例において，(10)の A を除いて，すべて男性の発話であり，また，あまり上品ではないというニュアンスがある。このような話者の偏在は，次に引用する，中東(編)(2001)の調査報告によっても裏付けられる。

(13)大学生への調査 ①どっちから来りゃー ②そりゃなんなら ③何が悪けりゃ

①～③いずれも使用率は男女ともに低い(男子の方が高い使用率を見せる)。「意味もわからない」という回答も少ない。つまり，この世代は使用を避けている可能性もある。(同書：170)

(14)世代別調査 「いつ行くか」「何をみているのか」「どこに行くのですか」の3文について共通語を示し，これらを方言形に直してもらう方法で調査した。(中略)どの地点も，若年層話者では(中略)1回答もなく，(中略)つまり，この係り結びの用法はもっぱら中・高年層に使われていることが分かる。(同書：190)

以上のこと，および，本稿の筆者(1965年生 男性 主な言語形成地は岡山県倉敷市)の内省に基づくと，当該の現象は，「男性」「中高年」が主な話者であり，現在ではあまり使用率は高くないが，理解は，年齢・性別を問わず，多くの場合，十分に可能，と言える。

3. 形態的／統語的特徴

以下では，当該の現象の形態的／統語的特徴を箇条的に述べることにする。

i. 述語の形態は，標準語の“～ば”に相当する，仮定条件を表す形態と同形である。

(1)どけー行きゃー／どけー行ったら／どこが良けりゃー／どこが静かなら／どこなら
どこへ行く？ どこへ行った？ どこが良い？ どこが静かだ？ どこだ？

(15)そけー行きゃーえー／そこが良けりゃーえー／そこが静かならえー／そこならえー
そこへ行けばよい そこが良ければよい そこが静かならよい そこならよい

((1)は再掲)

上例の対比から分かるように，同形であっても，(1)の不定語疑問文の場合は，(15)のような仮定条件の意味は全く感じられない。また，標準語では，“～ば”の形を持たない“です”

“ます”も、岡山方言では、次の(16)(17)のように、同種の形態を取ることができる。なお、あまり生産的ではないが、(18)のように、岡山方言では、“ですりゃー” (“です” + “ば”) の形で、ふつうの仮定条件も表せる。

(16) そりゃー何ですりゃー (それは何ですか?)

(17) なんぼー売りますりゃー (いくら売りますか?)

(18) そういう事ですりゃー, やめますらー (そういう事でしたら 止めますよ)

以上をふまえ、また、先行研究に従い、あまり適切とは言えないが、当該の現象の文末の形態を、本稿でも「仮定形」と呼ぶことにする。ただし、学校文法の「仮定形」とは異なり、“～ば”に相当する部分までを含む形態である。また、これも学校文法の「仮定形」とは異なり、本稿の「仮定形」は、“～たら” “～なら”等の異形態も含む⁵。

ii. 述語の形態(「仮定形」)には時制の対立がある。

(19) おめーが 言ゃー/言うたら ええ (お前が 言えば/言ったら よい)

(20) でーが言ゃー (誰が言う?) / でーが言うたら (誰が言った?)

標準語の“～ば” “～たら”と同じく、岡山方言においても、(19)のように、仮定条件の場合は、時制の対立はない。それに対し、(20)のように、不定語疑問文の場合は、“～ば” “～たら”で、時制の対立が認められる⁶。“～たら”が本来的な“た”の意味を残していると言ってもよい。

iii. 肯否疑問文(YN 疑問文)では不可能である。

(21) [WH 疑問文] いつ行きゃー (いつ行く?) / ーが来りゃー (誰が来る?)

(22) [YN 疑問文] *明日行きゃー (明日行く?) / *おめーが来りゃー (お前が来る?)

上の(21)(22)の対比に見られるように、当該の現象は、不定語疑問文においてのみ可能

⁵ これらの異形態の存在が、あくまで活用形(屈折辞)であり、特定の文末辞ではないということの証拠になる。

⁶ この現象は、活用論における、“～ば”が「ル形の条件形」、 “～たら”が「タ形の条件形」とする説を支持するものである。なお、中東(編)(2001)には、若い世代では、この現象自体は理解できても、時制の対立は曖昧になりつつあるとの報告がある。

なものであり、肯否疑問文では不可能である。「明日行けば、～」のような仮定条件の前件としての解釈しかできないのである。

この点が、当該の現象を、単に疑問文の文末表現としてではなく、文中の不定語（疑問詞）と文末の「係り結び」と呼ぶことが多いことの原因である。

iv. 主文のみの現象であり、補文（間接疑問文）では不可能である。

(23)*わしゃー [いつ行きゃー] 知らん (*わしは [いつ行けば] 知らない)

(24)わしゃー [いつ行くか] 知らん (わしは [いつ行くか] 知らない)

上の(23)に見られるように、当該の現象は、補文（間接疑問文）では成立しない。補文は、標準語と同じく助辞“か”（“やら”も可）が必要であり、主文とは明確に異なる。当該の現象は、主文においてのみ可能なものである。

v. 「WH島の制約」に従う。

(25) * [いつ行くか] 知つとりゃー (* [いつ行くか] 知っていれば)

(26) [いつ行くか] 知つとりゃー，教えて。 ([いつ行くか] 知っていれば，教えて。)

上の(25)に見られるように，“か”による補文（間接疑問文）内の不定語は、主文末の仮定形をスコープに取れない。(25)は不定語疑問文の解釈では非文法的であり、(26)のような仮定条件の前件としての解釈しかできない。

これは、いわゆる「WH島の制約」が当該の現象には存在することを示している。英語では、次の(27)のように、「WH要素」が主文の文頭に移動していない場合（いわゆる間接疑問文）、WH要素は主文全体をスコープにとることはできず、また、(28)のように、間接疑問文中から「WH要素」を抜き出すこともできない。

(27)Bill wondered [when John ate the apple].

(28)*What_i did Bill wonder [when John ate t_i]?

このような現象を一般化したのが「WH島の制約」であるが、英語のように可視的な移動がない日本語においても、解釈において、同種の制約が存在する⁷。

⁷ LFにおける移動のような、非可視的な移動を仮定すれば、日本語においても、統語的な「移

(29)太郎は [花子がいつ行くか] 知らない。

(30)あなたは [花子がいつ行くか] 知っていますか？

上の(29)はもちろん、(30)も、不定語疑問文ではない。(30)は、語用論的に不定語の値を求める表現として解釈される場合もあるが、文法的にはあくまで肯否疑問文である。いずれにしても、“か”による補文内の不定語は、主文全体をスコープにとることはできないと言える。

岡山方言では、この制約が、解釈だけではなく、形態的に、換言すると、可視的に確認することができるということになる。標準語と異なり、目に見えるということである。

注意すべき点を付言しておく。これは先のiv.や次のvi.とも関係するが、岡山方言の仮定形自体は、「島」を形成しないということである。

(31)いつ行きゃー、ええんなら。 (いつ行けば、いいんだ？)

上の(31)は、不定語“いつ”の値を求める解釈、すなわち不定語疑問文の解釈である。不定語“いつ”のスコープは主文全体になっており、仮定形による補文ではあくまで仮定条件の意味を表している。これは、「WH 島の制約」に対して、いわゆる「相対化最少性」(Rizzi(1990))を用いた説明ができないことを示している。

vi. 「長距離」も可能である。

(32)でーが来る(て)言うたら

(33)でーが [来る(て)] 言うたら (誰が「来る」と言った？)

(34)えーつは [でーが来る(て)] 言うたら (あいつは「誰が来る」と言った？)

上の(32)は多義であり、(33)および(34)のような解釈を許す。ここで重要なのは(34)である。(34)は、不定語“でー”が補文を飛び越えて、主文全体をスコープとしてとっており、結果として、主文全体が不定語疑問文の解釈であり、そして、主文末が仮定形をとっている。この現象は、()内の標準語訳が示しているように、標準語でも成り立つ。違いは、標準語が解釈のみの問題であるのに対し、岡山方言は、形態に現れるということである。

なお、この現象には、主文の述語動詞に制限があることが知られており、いわゆる「架

動」の問題として分析可能である (西垣内・石居(2003)等)。

橋動詞(bridge verb)」の場合のみ可能である。

(35)*え一つは [で一が来るて] いがったら (*あいつは「誰が来る」と叫んだ?)

上例の“いがる”(“叫ぶ”)のような「非架橋動詞」では、不可能である。

岡山方言の「架橋動詞」は“言う”と“思う”の2語のみであり、この2語の場合においてのみ、(34)のような「長距離」の現象を起こすことができる。

付言するならば、次の(36)(37)のように、英語において、“say”のような「架橋動詞」は、長距離のWH移動だけではなく、「補文標識削除」も許すが、“whisper”のような「非架橋動詞」はどちらも許さないということが知られているが、岡山方言の場合も同様であると言える。(38)(39)のように、岡山方言において、「架橋動詞」の2語に限って、いわゆる「ト抜け」(「補文標識削除」)が可能なのである。

(36)a. What_i did John say that Mary stole t_i ?

b. *What_i did John whisper that Mary stole t_i ?

(37)a. John said ϕ Mary stole a diamond.

b. *John whispered ϕ Mary stole a diamond.

(38)a. 明日^{あした}りゃ一休む ϕ 言よ一たで (明日は休むと言っていたぞ)

b. *明日^{あした}りゃ一休む ϕ いがりよ一たで (明日は休むと叫んでいたぞ)

(39)a. わしゃ一行こー ϕ 思よんじゃ (わしは行こうと思っているんだ)

b. *わしゃ一行こー ϕ 考えよんじゃ (わしは行こうと考えているんだ)

「架橋動詞」の範囲は英語の方が広いが、「架橋動詞」における「(長距離の)WH移動」と「補文標識削除」の間の相関関係が、英語と岡山方言に共通して見られることは、普遍性を考える上で、非常に興味深い。

標準語には、そもそも「補文標識削除」の現象が存在しないため、このような点は、標準語の日本語と英語の対照からは見えてこない。方言を含めた対照研究が重要であることを示す例であると言える。

以上の i.~vi.に基づくと、岡山方言における当該の現象においては、次のようなことが明らかになったと思われる。すなわち、不定語疑問文／肯否疑問文、また、主文／補文の非対称性が、形態的に明確に現れており、主文において、不定語(WH要素)と関係を持つのは、「仮定形」という屈折要素(INFL)である。

4. 標準語との対照

日本語（標準語）の不定語疑問文を、統語論的に分析する場合、WH 要素（不定語）と助辞“か”との関係に基づいてなされるものが多い。WH 要素と“か”との間にスコープが表示されると考えるのである。

(40)a. 太郎は [花子が何を読んだと] 言いましたか？

b. 太郎は [花子が何を読んだか] 言いました。 (西垣内・石居(2003:114))

例えば、上の(40a)では、WH 要素“何”は文末の“か”と関係を持つので、スコープは文全体となり、結果として WH 疑問文としての解釈になるが、(40b)では、WH 要素“何”は補文の“か”と関係を持つので、スコープは補文内にとどまり、文全体には及ばないため、結果として WH 疑問文の解釈にはならない、というような分析である。

その際の、WH 要素と“か”との関係のあり方は、WH 要素の「移動」、あるいは“か”による「束縛」と、いくつかの可能性があるが、生成文法の枠組みでなされる統語論的な分析においては、このような“か”との関係を前提とするのが、一般的である。

しかしながら、これはあくまで「生成文法の枠組みでなされる統語論的な分析」において「一般的」なのであって、記述的な日本語研究においては、決してそうではない。一例として、益岡・田窪(1992)の記述を次にあげる。

(41)*次は何を見るか (↑) (益岡・田窪(1992:137))

(42)質問型の疑問語疑問文は、普通体では、原則として「か」が使えない。(同)

上のように、不定語疑問文（益岡・田窪(1992)では「疑問語疑問文」）においては、丁寧体（デス・マス形）でもない限り、主文末に“か”は生起できない、ということが事実として認められているのである。(40a)は丁寧体になっている点に注意されたい。

この点は、益岡・田窪(1992)だけでなく、記述的な日本語研究においては、言わば「常識」に属するものであり、生成文法の枠組みでなされる分析の前提と大きく隔たっているものである⁸。

本節では、標準語の不定語疑問文における主文末の形態について、改めて事実を確認し

⁸ 「記述的な研究」と「理論的な研究」との乖離が、そしてその乖離に由来する弊害が現れていると言ってよい。

た後、前節で述べた岡山方言の一般化との対照を行うことにする⁹。

- (43)a. 太郎がそう言ったの {か/*だ} ? [肯否疑問文]
b. 太郎が何を言ったの {*か/だ} ? [不定語疑問文]

まず、上の(43)のような対比から、主文末の形態に関して、肯否疑問文と不定語疑問文では、次のような非対称性があると考えられる。

- (44) 主文の場合：肯否疑問文は、文末に省略可能な“か”が生起する。
不定語疑問文は、文末に特定の助辞は生起しない。

次のような例は、(44)のような肯否疑問文と不定語疑問文の違いがよく分かる。

(45)それならどうしておまえは、こんな場所に身を隠しているんだ。だれかにねらわれるとでも思ったのか

(46)日に何度となく「わしを愛してくれているのか」と訊かずにはおれず、「もちろんですわ」という答えを得ても「わしのどこを愛しておるのだ」と質問を重ねます。

このような、述語が“～だ”の形態を持つものは、データとして重要である。次例のように、肯否疑問文になることはできず、また“か”との共起もできないからである¹⁰。

- (47) [肯否疑問文として] *社長は彼だ? / *社長は彼だか?

なお、多少、詰問調ではあるが、“だ”の代わりに“か”を用いれば、文法的である。

- (48)社長は彼か?

これに対し、不定語疑問文の場合は、“だ”であっても何ら問題ない。

- (49)社長は誰だ?

⁹ 三宅(2006)では、主文だけでなく、補文の場合も含めて、一般化がなされている。

¹⁰ 補文であれば、「何が何だか分からない」のように共起できるが、主文では不可能である。

“だ”と“か”は共起できないのであるから、(49)は、“か”が省略されたのではなく、そもそも“か”は存在しないと考えなければならない。

不定語疑問文の場合、むしろ“か”が不可能である。そもそも、不定語自体を述語とする文で、聞き手に対して質問を行う場合（疑問文として成立する場合），“だ”を伴うことはあっても、たとえ詰問調であっても、“か”を伴うことはないと言える¹¹。

(50)おまえは 誰だ？／*誰か？

(51)それは 何だ？／*何か？

この点の傍証として、関西方言を観察してみよう。関西方言における文末表現“ねん”は標準語の“のだ”にほぼ相当する¹²。そのことを前提とすると、次の対比は、前述の標準語の“だ”の場合と全く同様であることが分かる。

(50) [肯否疑問文として] *社長はあいつやねん？ / *社長はあいつやねんか？

(51)社長は誰やねん？

“ねん”は、肯否疑問文にはなれず、“か”とも共起できないが、不定語疑問文にはなれるのである。

以上のように、(44)は妥当なものと言えるが、一見、これの反例と思われるデータが存在する。以下ではそれを指摘するが、それらは、実際には(44)の反例にはならないことが示される。

第一に、「主文のように見える補文（名詞節）」の場合である。次のような例を見られたい（句点まで下線を引いているのは意図的である）。

(52)新元号をどう使うか。それは国民一人一人が自分の意思で決めることである。

(53)電波を浴びたらどうなるのか。わが国ではこれまで放置されてきた、電波による健康被害の問題に、ようやく行政が取り組むことになった。

(54)火星がなぜ注目されているのか。地球の運命を占う星であり、将来、人類が移り住めそうな唯一の天体だから、と科学者たちは口をそろえる。

¹¹ 次は、歌詞として有名な実例である。

「あれは誰だ、誰だ、誰だ」（デビルマン）／「誰だ！誰だ！誰だ！」（ガッチャマン）

¹² 標準語の“だ”は、関西方言では“や”であり、“ねん”は、“のや”→“ねや”→“ねん”のような変化をたどったとされる。

これらの例は、句点で区切られていることから、一見、主文のようであり、しかも不定語のスコープを示す“か”が文末に生起している。ただちに(44)の反例と思わせるような例である。しかしながら、これらは、聞き手に答えを要求するような、発話行為としての「質問」を表現するものではない。さらに言えば、そもそも「文」としての独立性も疑わしいものである。

これらは、見た目は「文」のようでも、内実は、一種の名詞節なのではないかと思われる。例えば、(52)は、直後に指示詞“それ”で前文全体を受けていることが示唆的である。前文“[新元号をどう使うか]”をそのまま“それ”の部分に代入しても、ほぼ同義の文が形成できるからである。次例を参照されたい。

(55)新元号をどう使うかは国民一人一人が自分の意思で決めることである。

このような、「一見『文』のようだが、内実は一種の『名詞節』」という現象は、「名詞節」に限定せず、広く従属節とみた場合、文末が“か”の文にだけでなく、一般の文に幅広く観察できるものである。このような現象は既に、野田(1989)が「真性モダリティをもたない文」と呼び、記述している¹³。

(56)若くて魅力的な女性が「肩でもほぐしませんか」とほほえみながら部屋を訪れる。

この誘いに乗ったばかりにトラの子の旅費をごっそり盗まれるという事件がシンガポールで続発している。 (野田(1989:138))

(57)まったく同じ品物やサービスなのに値段が違う。 そんな混乱を消費税が運んでくるのではないかと、という不安がささやかれている。 (同)

上例の波線部分が野田(1989)の言う「真性モダリティをもたない文」である。このようなタイプの文は「文らしさ」を欠き、従属節に近い構造を持つと考えられるため、「文らしい文」であれば持っているはずの「真性モダリティ」を「もたない」と分析しているのである。「真性モダリティをもたない文」という名称の妥当性はここでは不問にするとして、先にあげた(52)～(54)のような例が、このようなタイプの文であることは明らかであろう。

繰り返すが、(52)～(54)が文法的なのは、それが従属節(名詞節)相当だからである。従属節(名詞節)、即ち補文であれば、“か”が生起していても何らおかしくはないし、む

¹³ 野田(1989)では、本稿で議論している疑問文の例は扱っていない。本稿の試みは、野田(1989)の論を疑問文の場合にまで展開するものと言ってよい。

しろ当たり前とさえ言える。不定語を含む補文は、文末に“か”を伴わなければ非文法的だからである。

(58)誰が来る { *φ / *の / *こと / か } は分からない

第二に、“だろう”が生起した場合である¹⁴。次のような例を見られたい。

(59)社長は誰だろうか。 / 社長はいつ来るだろうか。

このような“だろう”に“か”が後接した疑問文の場合、あきらかな主文であるにもかかわらず、不定語の範囲を示す“か”が文末に生起している。(44)の反例と思わせる例となっている。

しかしながら、このような“だろうか”の形になった場合の“か”は一般の疑問文における“か”とは、あきらかに異なった性格を有するものである。まず、イントネーションに関する事実が大きく異なる。

(60)社長は彼か (↑) / 社長は彼 (↑) = 社長は彼か

(61)社長は彼だろうか (*↑) / 社長は彼だろう (↑) ≠ 社長は彼だろうか

上の(60)が示しているように、一般の疑問文は、上昇のイントネーションをとることが可能であり、また、“か”を削除して、上昇のイントネーションで代用しても等価な文を形成することができる。これに対し、“だろうか”の場合、(61)のように、そもそも上昇のイントネーションをとることができない。また、“か”を削除して、上昇のイントネーションで代用し、意味的に等価な文を形成することもできない。“か”を削除して、上昇のイントネーションにした文は、いわゆる「確認要求」としての意味になり、“だろうか”の文の持つ意味とは大きく異なってしまうからである¹⁵。

上は肯否疑問文の場合だったが、不定語疑問文の場合でも事情はほぼ同じである。(62)のように“か”の削除は可能であるが、(63)で示しているように、上昇のイントネーションをとることは、“か”の有無にかかわらず不可能である。

(62)社長は誰だろうか = 社長は誰だろう

¹⁴ 疑問文に生起した“だろう”に関する議論の詳細は、三宅(2011)を参照されたい。

¹⁵ 「確認要求」に関する詳細も、三宅(2011)を参照されたい。

(63)社長は誰だろうか (*↑) / 社長は誰だろう (*↑)

イントネーションという外形的なことだけでなく、機能という点でも、“だろうか”の文は一般の疑問文（質問文）とは異なった性格を持っていると言える。次のような例を見られたい。

(64) [その映画を観ていないことが明らかな人に対して]

#今度上映されるスピルバーグの新作は面白いか?

(65)今度上映されるスピルバーグの新作は面白いだろうか?

一般の疑問文（質問文）は、語用論的な条件として「聞き手が当該の情報を持っていないことがあきらかな場合は使えない」という性質を持っている。したがって上の(64)のような文脈では、不適切な発話となってしまう。ところが、(65)のように、“だろうか”の文であれば、このような文脈であっても、何ら問題のない発話である。三宅(2011)で「弱い質問」（聞き手に不明確な応答をする余地を残す質問）と呼ばれている、“だろうか”の用法である。

いずれにしても、“だろうか”の場合は、外形的にも、機能の上でも、一般の疑問文（質問文）とは異なった性質を持つと言えるため、これは例外扱いでよく、(44)の反例とみなす必要はないと考える。

なお、次の(66)のように、“か”に“な”が後接し、“かな”の形をとった場合も、不定語疑問文に生起することが可能であるが、これは、(67)のように“かな”が“だろうか”とほぼ同じ機能を持っているためであると考えておく¹⁶。

(66)社長は誰かな / 誰が来るかな

(67)誰が来るかな ⇔ 誰が来るだろうか

第三に、丁寧体（デス・マス形）の場合である。

(68)社長は誰ですか / 誰が来ますか

(69)社長は誰です? / 誰が来ます?

¹⁶ “かな”について、特に“だろうか”との機能の上での類似性についても、詳細は、三宅(2011)を参照されたい。

上の(68)が示すように、丁寧体の場合、不定語疑問文であっても、“か”は全く自由に生起できると言える。しかしながら、このばあいの“か”は、(69)のように、なくてもかまわないのであり、随意的に生起可能と言うべきものである。なければならないというような義務的なものではない。

“だ”と“です”を比べてみると、“だ”は“か”と相互排他的（共起できない）な関係なのに対し、“です”は“か”と共起できる付加的な関係にあると言える。丁寧体にした場合、相互排他的な関係が付加的な関係に変わるということに関しては、動詞“ある”の否定形が類推される。

(70) “だ”：“か”（*だか） / “です”：“ですか”

(71) “ある”：“ない”（*あらない） / “あります”：“ありません”

いずれにしても、“か”の生起が義務的ではない以上、(44)の反例とする必要もないということになる¹⁷。

第四に、“か”の異形態と考えられることがある“の”が生起した場合である。

(72) どこに行く { *か / の } ?

上例のように、不定語疑問文において、たしかに“か”は不可能でも、“の”であれば、生起可能である。この場合の“の”は、疑問標識として、“か”の「異形態」のようなものであると仮定されることがある。生成文法の枠組みによる統語論的な分析においては多く見られる仮定である。もし本当に“の”が“か”の異形態であれば、不定語疑問文においてはやはり文末に特定の助辞が生起すると言え、確かに(44)の反例となり得る。

しかしながら、これは、単純にこの仮定、すなわち“の”を“か”の異形態とみなす仮定が間違っているのであって、(44)の反例になり得ないことは、すぐに分かる。

(73) どこに行く { ϕ / の } ?

上の(73)のように、そもそも“の”は義務的ではなく、また形態的にゼロ（ ϕ ）の場合とは機能的にも明らかに異なる。次の(74)と(75)の対比を参照されたい。

¹⁷ ただし、次例に示すように、終助詞“ね”がさらに後接する場合は、“か”の生起が義務的になる。この現象については、別稿を期したい。

誰だ？ / 誰です？ 誰だね？ / *誰ですね？（OK 誰ですかね）

(74)ねえ、次は、どこに行く {φ/#の} ? [聞き手と一緒に計画を立てている文脈]

(75)今日はまたおしゃれな服を着ているけど、どこに行く {#φ/の} ?

このような機能の上での違いは、不定語疑問文に限ったことではなく、肯否疑問文でも見られるものである。

(76)おしゃれな服を着ているけど、デートでも行くの?

(77) [同じ文脈で] #デートでも行く?

(78)「これ、ちょっとだけ飲んでみる?」「うん」

(79) [同じ文脈で]「#これ、ちょっとだけ飲んでみるの?」

このような場合の“の”は、助動詞相当とされる、いわゆる“のだ”の使用条件に従っているとみなされる(田野村(1990), 野田(1997)等)。上のような“の”を“のだ”の“の”と考えれば、何の問題もなく説明できるということである。

(80)太郎がそう言ったの {か/*だ} ? / 太郎が何を言ったの {*か/だ} ?

“の”は疑問標識ではなく、肯否疑問文の場合は“のか”の省略形、不定語疑問文の場合は“のだ”の省略形とみなすのが妥当であると思われる¹⁸。次のような例は、本稿のように“のだ”の省略形と仮定することによってはじめて適切に説明できるものである(“の”を“か”の異形態とする仮定では不可能である)。

(81)誰が社長 {*の/なの/なのだ} ?

(82)誰が来るだろう {か/*の} cf. *太郎が来るだろうのだ

以上、4点にわたって、反例らしきものを見たが、これらが実際には反例ではなかったので、不定語疑問文の主文において、特定の助辞(具体的には“か”)は生起しないということは、より明確になったと思われる。

さて、主文において、特定の助辞が現れないということは、不定語疑問文として成立する要件として、主文では特定の助辞を必要としない(補文では“か”が必要)ということ

¹⁸ 栗原(2010)も、“の”は“か”の異形態ではないということを主張しているが、やはり補文標識の一種であるとしており、本稿のように“のだ”の省略形であるとはみなしていない。

であり、換言すれば、主文末の述語が「文」として終止できる形であればよいということである。

述語が「文」として終止できる形のことを、広い意味での「終止形」と呼ぶならば、主文において、不定語（WH 要素）と関係を持つのは、「終止形」という「屈折要素（INFL）」であるということになる¹⁹。「終止形」はその名の通り、不定語疑問文でなくても、文が終止する形であり、何ら特殊な形ではない。そのため、標準語においては見えにくいが、主文の不定語疑問文において、不定語（WH 要素）と関係を持つのは、特定の助辞（“か”）ではなく、「屈折要素（INFL）」とせねばならない。

このような標準語に対し、岡山方言は、「仮定形」という特殊な形を持つため、主文の不定語疑問文において、不定語（WH 要素）と関係を持つのは、「屈折要素（INFL）」ということが見えやすい。

まとめると、標準語の不定語疑問文（WH 疑問文）においても、実は、不定語疑問文／肯否疑問文、また、主文／補文の非対称性があり、主文において、不定語（WH 要素）と関係を持つのは屈折要素（INFL）である、ということが言える。

そして、岡山方言との違いは、それを形態的に明示しないという点のみである。岡山方言は、標準語にも見られる一般的な性質を、形態的に明示しているにすぎないとも言うことができる。

5. 統語論的分析への示唆

前述したように、本稿において考察の対象としている、岡山方言の不定語疑問文における、主文の述語が特殊な屈折変化を起こす現象（「仮定形」になる）は、「（疑問詞の）係り結び」と呼ばれることが多い。しかし、古典語において見られる一般的な「係り結び」と同列に扱うことになる、このような用語法は、問題があると思われる。

たしかに、古典語における一般的な「係り結び」においても、不定語のみによる（いわゆる係助詞を伴わない）ものは観察される。次は、山口(1990)からの引用である。

(83)古代および中世文語における不定方式の表現のうち、疑問詞のみを有する例には、文末が活用語の場合、次のように(イ)連体形で終わる場合と、(ロ)終止形で終わる場合とが見られる。古代語には、それにもう一つ加えて、(ハ)已然形で終わる場合もあった。（山口(1990:107)）

¹⁹ 広い意味での「終止形」とは、学校文法における「終止形」だけでなく、いわゆる「タ形」も含むということである。

(イ) などかくは仰せらるる (落窪・一)

(ロ) わが髪の雪と磯の白波といづれまされり沖つ島守 (土佐・一月二十一日)

(ハ) かなし妹をいづち行かめと山菅のそがひに寝しく今し悔しも (万葉・十四・三五七七)

補足すると、山口(1990)はさらに、(イ)のタイプが最も標準的であり、(ロ)のタイプはいずれも和歌の例で散文はなく、(ハ)は反語的表現に限定される、ということも述べている。

このような古典語の「係り結び」と岡山方言の当該の現象を同列に扱うべきではないことは明らかである。岡山方言の「仮定形」は、(83)の(イ)(ロ)(ハ)のいずれにも該当しないし、そもそも係助詞による「係り結び」自体も存在しない。不定語疑問文にだけ存在する現象である。

しかしながら、次に引用する長谷川(2012)のように、「係り結び」を言わば象徴的な用語法ととらえ、これを統語構造における「一致」として再解釈するならば、岡山方言の当該の現象は、まさに「係り結び」と言ってよいということになる。

(84) CP レベルでの「一致」現象 (いわゆる「係り結び」)

主要部 A (結び・述語形態・終助詞) の素性が、下位構造に「一致」する素性を持つ要素 B を指定 (要求) し、その素性を持つ要素と局所的関係に入り、文の特定の意味解釈・語用機能を可能とする現象。 (長谷川(2012:31))

岡山方言の当該の現象を、「一致」の現れであるとみるならば、一見、全く異なる現象に見える英語のいわゆる「WH 移動」の現象と同様の分析を試みるのが可能になり、言語間の普遍性を探る手段が得られることになる。

ただし、上の(84)のような仮定に基づく分析を展開するためには、CP の精緻化を図る、いわゆる「カートグラフィー(cartography)」の研究方略を前提とする必要がある。

本稿では、その領域に踏み込むまでには至っていないので、示唆にとどめておくことにし、今後の課題としたい。

6. おわりに

本稿は、岡山方言の不定語疑問文 (WH 疑問文) における、主文の述語が特殊な屈折変化を起こす (「仮定形」になる) 現象をめぐって、考察をし、次のような結論を得た。

・岡山方言の当該の現象に関する i.~vi.のような記述的一般化に基づき、岡山方言の当該の現象は、不定語疑問文／肯否疑問文、また、主文／補文の非対称性が、形態的に明確に現れており、主文において、不定語（WH 要素）と関係を持つのは、「仮定形」という屈折要素（INFL）である、ということが言える。

・標準語の不定語疑問文（WH 疑問文）においても、実は、不定語疑問文／肯否疑問文、また、主文／補文の非対称性があり、主文において、不定語（WH 要素）と関係を持つのは屈折要素（INFL）である、ということが言える。岡山方言との違いは、それを形態的に明示しないという点のみである。

・不定語（WH 要素）と屈折要素との関係は、統語論的な「一致」とみなす可能性があるが、形態的に明示される岡山方言は、その点が分かりやすい。

【参考文献】

青山融(1998)『岡山弁 JAGA!』アス

井上史雄・吉岡泰夫(監修)(2003)『中国・四国の方言—調べてみよう暮らしのことば』
ゆまに書房

江端義夫(1982)「愛媛県の方言」『講座方言学 8 —中国・四国地方の方言』国書刊行会

尾上圭介(1983)「不定語の語性と用法」渡辺実(編)『副用語の研究』明治書院

神鳥武彦(1982)「広島県の方言」『講座方言学 8 —中国・四国
地方の方言』国書刊行会

栞原和生(2010)「日本語疑問文における補文標識の選択と CP 領域の構造」長谷川信子(編)
『統語論の新展開と日本語研究』開拓社

国立国語研究所(編)(2007)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成
第 14 巻 鳥取・島根・岡山』国書刊行会

田野村忠温(1990)『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院

中東靖恵(編)(2001)『岡大生の言語生活 1』岡山大学文学部中東研究室

西垣内泰介・石居康男(2003)『英語から日本語を見る』研究社

野田春美(1997)『「のだ」の機能』くろしお出版

野田尚史(1989)「真性モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダ
リティ』くろしお出版

長谷川信子(2012)「現代版『係り結び』としてのト条件節構文—CP 構造における従属節
と主節の呼応—」『日本語文法』12-2 日本語文法学会／くろしお出版

平山輝男(編)(1997)『日本のことばシリーズ 36 徳島県のことば』明治書院

平山輝男(編)(1998)『日本のことばシリーズ 34 広島県のことば』明治書院

- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語—改訂版—』くろしお出版
- 三原健一(1994)『日本語の統語構造』松柏社
- 三宅知宏(2006)「日本語の疑問表現と統語構造」神田外語大学 CLS ワークショップ発表資料
- 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 虫明吉治郎(1958)「疑問詞の係結—中国方言の場合—」『國語學』34.
- 虫明吉治郎(1982)「岡山県の方言」『講座方言学 8 —中国・四国地方の方言』国書刊行会
- 森重幸(1982)「徳島県の方言」『講座方言学 8 —中国・四国地方の方言』国書刊行会
- 山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』明治書院
- Rizzi, Luigi(1990) *Relativized minimality*. MIT Press
- Rizzi, Luigi (1997) “The fine structure of the left periphery” in Liliane Haegeman (ed.)
Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax Kluwer Academic Publishers
- Stowell, Tim(1981) *Origins of phrase structure*. Doctoral dissertation, MIT